



お江戸舟遊び瓦版 1063号

水彩都市江東 ころろ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり

お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田 13-10

星野克美 「人新世の絶滅学 (3)」

～人類・文明絶滅の思弁的空無実在論～ 鳥影社 22・11・30

第二編 形而上の絶滅学

第IV部 審判

これまで「形而下の絶滅学」の諸研究の知見を検討してきた。「人新世」の警告が確かであるとすれば、現生人類と工業文明の絶滅の「現実性」をどう受け止めるか——それが「形而上の絶滅学」の課題である。

第7章 人類・文明の絶滅学

- 第7章では、前章までの研究成果を「人類・文明絶滅の未来展望」として総括し、「人類・文明絶滅の哲学的思考枠組み」について述べる。
- 絶滅未来年表：人類・文明絶滅への道程を下表に示した。



|                    | 絶滅顕現期 (2000～)              | 絶滅急進期 (2030～)              | 絶滅終末期 (2060～)              |
|--------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| ・                  |                            |                            |                            |
| C02濃度/上昇気温/人口      | 417ppm/1.2℃/78億人           | 600ppm/3℃/40億人             | 900ppm/4.8℃/10億人           |
| 異常気象<br>気候災害       | 干ばつ、渇水、巨大台風<br>凍土融解、パンデミック | 巨大台風、凍土融解・<br>海面上昇、パンデミック  | 凍土融解、海面上昇<br>都市水没、感染死急増    |
| 燃料・金属・生物資源         | 石油ピークアウト、脱化石燃料、<br>生物多様性喪失 | 石油枯渇、太陽光・風力<br>発電途絶、金属枯渇   | 工業文明絶滅、念慮・電力・<br>金属枯渇、貧困蔓延 |
| 資本主義・金融恐慌・<br>財政通貨 | 資本主義衰退、リーマン<br>ショック、コロナ、恐慌 | 経済成長衰退、国民経済<br>破綻、通貨システム破綻 | 資本主義消滅、国民経済<br>消滅、通貨消滅、物交換 |

この表は、第2章から第6章までの研究成果を統合思考するためのマトリックスである。21世紀を通じて「人類・文明の絶滅」が顕在化し、急速に進行し、今世紀末に絶滅状態になる。

- 「人新世：大絶滅」の重要な要因は、気候変動であり、C02濃度・大気温度上昇である。次に「氷床融解」の危機的要因で、第3は「氷床融解による海面上昇と都市水没・沿岸水没」である。
- 凍土融解・氷床融解・海面上昇は、地球惑星上のあらゆる地域で「都市水没・沿岸水没・海浜消滅」を引き起こしつつあり、人類や生物の居住地を海面下に埋没させつつある。
- 「人新世：大絶滅」の仮説が検証されつつあり、「人類・文明の絶滅」の進行が判明した。
- 「闇を開く」というプロパガンダを吹いた啓蒙主義の時代から、現代の「絶滅の闇に向かう」というディストピアに陥るまで、誰も、「人類絶滅の潜勢性」の危機を認識できなかった訳ではない。先駆的な批判的研究はあった。ルソー等は「理性の絶対性」や「自然支配の正当性」を批判したが、近代の人類は、欲望と衝動に囚われ、「科学革命/産業革命/経済革命」という衝動に傾斜して、ひたすら「工業文明」の発展を目指し暴走してきた。
- 工業文明は生産様式や生活様式だけでなく、戦争様式にも戦争科学や工業システムを取り込み、大量殺戮とホロコーストを断行した二つの世界大戦を起こした。工業様式の世界大戦の帰結は、都市文明の大破壊、ホロコーストと原爆実践投下といった「人類性の本性」を現し凄惨なものだ。
- 大戦の荒廃を「復興需要の好機」と捉えた戦勝国欧米の資本主義は、文明発展の頂点を極めたが、1970年代には、工業生産の増大の半面で、大気汚染・河川海洋汚染などの環境汚染、環境破壊が各地で問題化し、「ディープ・エコロジー」が生まれ、1992年地球サミットで「生物多様性条約」に結実し、現在の「人間中心主義からの脱却」の思想へと発展した。
- ニーチェは、今日を予言したような一文をしたためている。「人間の知性など存在していなかったような永遠というものが、これまで既にあったのである。そしてまた人間の知性が消滅してしまえば、何事も生起しなかったのと同じことになるであろう」

## 第8章 人新世の「崩壊哲学」

- ・ 第8章は、前章に示した「絶滅の海路図」の行き先に「大絶滅の必然性」があるが、「哲学の羅針盤」が**絶滅回避**へと人類を導く可能性があるのかが主題である。
- ・ 人類と文明に関するすべての自然科学・人文社会学、とりわけ哲学は、「人類も文明も叡智も絶滅する、実在である」という認識を、すべての思考の基盤となる「**絶滅基準**」として設定することが重要である。
- ・ 近代に**台頭した工業文明**は、①理性の使用によって事物を探究して**自然界を支配**することを正当化し、②**理性の絶対性と機械論の思想**に基づいて、③「人工の魂・関節・神経・肉体に擬える国家」という“リヴァイアサン（怪物）”のような文明を標榜するという、「啓蒙のプロパガンダ」によって人類を方向付けるために構築された。工業文明は、哲学者によって生み出された「**啓蒙主義の思想**」によって方向づけられて大いに発展したのであるが、**惑星規模の自然支配と自然破壊**をも成し遂げてしまった。それは、産業革命以降の**わづか250年**の間に。
- ・ 大きな物語として営々と築いてきた**叡智の蓄積**を、人類がそれらを破壊的・創造的な武器として壮大巨大な「工業文明」を築く手段的道具として活用し、猪突猛進の勢いで「地球文明」の次元までに発展させてきた。ところが、その人類の活動が、**自然世界を破壊し、異常態の気候変動**を起し、全人類と全生物を絶滅に落とし込むような「**人為の大絶滅**」を来すに至った。

## 第9章 「地球気候」の实在論

- ・ **現代の気候科学**は、地球気候の異常態について様々な研究に取り組んでおり、異常態となった気候変動が人類・生物の大絶滅を起しつつある凄惨事態を研究し、さらに、近未来の人類・生物の大絶滅を予測するまでに至っている。
- ・ 突発的に発生する**巨大地震**と同じように、**人新世：大絶滅**を起こして、ますます激化する気候危機と気候災害は、ますます「**無秩序・偶然性**」の度合いを増していくだろう。
- ・ **現代文明の批判哲学**を一貫して追求してきた**ハンナ・アーレント**は、もう半世紀以上も前の1958年に『人間の条件』を著し、強靱な哲学思考を駆使して「**人類の地球破壊力**」を予言していた。「人新世：大絶滅」に至る「人類の地球破壊力」を予言した先駆的な哲学研究である。  
「人間の**工作物の創造者**“工作人”は、これまで常に**自然破壊者**であった。機械とその過程の自動的な運動は、**世界と物を支配し、破壊し始めている**とさえいえる。人間は、自分の手になる生産物なら何であれ、それを**破壊する能力**を常に持っているし、今日では、人間が作ったのではない地球と地球規模の自然さえ**破壊する潜在能力**を持つまでに至った。破壊を防げ、新しいことを始める能力がなかったとしたら、死に向かって走る人間の寿命は、一切の人間のものを滅亡と破壊に持ち込むだろう」と。
- ・ 気候危機が激化した2010年代以降、「**地球気候実態と人類絶滅危機**」に関する哲学研究が急激に台頭した。世界各地で激甚な気候災害が頻発してきたが、加えて、**パンデミック**が全世界を襲い、死を想えという世界観を全人類の中に復活させた。そうした世界観からラブロックの『**ガイアの科学**』、『**ガイアの復讐**』が生まれた。彼は大気化学分析の科学者で、地球温暖化、気候変動、古気候学等の、現代の気候危機と**人類・生物の絶滅危機**に関して論述している。



- ・ 啓蒙主義に洗脳された現生人類と怪物文明が生み出した、**フランケンシュタイン**（人工怪物）の似姿を持つ「**絶滅圧力**」とは、実は**人類悪性**と**怪物文明**が根源的に秘める「**凶暴性の鏡像**」だったのである。

**所感：**人類が生み出した工業文明は人類を絶滅させるものにまで進んでしまったという。トランプとハリスの大統領選に類推される感もするが。（文責 中瀬）